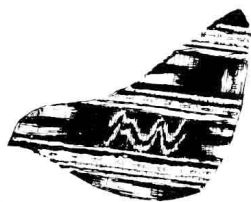
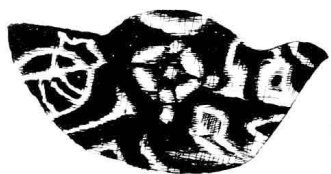


暦のある風景

利根川裕



晉の
ある風景
利根川
裕



利根川 裕 (とねがわ ゆたか)

昭和2年新潟県糸魚川市に生れる。東京大学文学部卒業。中央公論社勤務ののち、小説『宴』(筑摩書房刊・現在中公文庫に収録)でデビューとともに文筆生活に入る。また早稲田大学政経学部講師を勤め、テレビ朝日系番組でキャスターとしても活躍中。主なる著書に、『館』(講談社)『革命の使者―北一輝』(人物往来社)『亀井勝一郎』(大和書房)『開かれた暦』(中央公論社)『十一世市川團十郎』(筑摩書房)などがある。

現住所 〒161 東京都新宿区中井 2-16-12



暦のある風景

定価 一二〇〇円

昭和六十年八月八日 第一刷発行

著者 利根川 裕

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

〒一一二 東京都文京区音羽二一二―二二
電話 東京(〇三) 九四五―二二二(大代表)
株式会社講談社出版研究所

編集 代表 長谷川喜市

〒一一二 東京都文京区小日向四一六一 一九 共立会館
電話 東京(〇三) 九四三―二六二三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

カバー 千代田オフセット株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

©利根川裕・一九八五年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

曆のある風景／目次

I 顔のない自画像

恩師列伝の試み 5

遺書と日本刀 21

顔のない自画像 38

II 私の中の文学者

相馬御風 53

亀井勝一郎 70

林房雄と三島由紀夫 86

III 花ト化ス可シ

臼井吉見番編集者 101

処女作の自画自賛	105
味の三代記	113
ああ日の丸弁当	116
花卜化ス可シ	120
花の受難	123
酔ってのたわごと	126
行くあてのない話	130
名は体をあらわす	134
女の意地悪	139
年賀状あれこれ	144
小山清さんのこと	147
松倉米吉歌碑によせて	150
素面の清水房雄氏	153
中野好夫先生追悼	157
十二代目団十郎誕生	161

IV 音楽の花びら

ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲集『四季』	167
ハイドン 交響曲一〇一番ニ長調『時計』	174
ハイドン 交響曲一〇四番ニ長調『ロンドン』	181
モーツァルト ピアノ協奏曲二〇番ニ短調	188
モーツァルト 『レクイエム』ニ短調	195
シューベルト 歌曲『冬の旅』など	202
ベルリオーズ 『幻想交響曲』	208
ブラームス 交響曲第一番ハ短調	215
フランク ヴァイオリン奏鳴曲イ長調	222
ドヴォルザーク チェロ協奏曲ロ短調	228
チャイコフスキー 交響曲第六番ロ短調『悲愴』	235
バルトーク 弦・打楽器とチェレスタのための音楽	242

暦のある風景

装画・題字・カット 桂 ゆき

装幀 鈴木邦治

I
顔のない自画像



恩師列伝の試み

I

音楽家の大バッハには、息子エマヌエルの記した『死者略伝』という書物が残されている。大バッハ自身、バッハ一族の年代記を執筆していて、それをエマヌエルが補筆完成させている。

なにしろ、バッハ一族は二百年のあいだに五十人もの勝れた音楽家を生みだしているのだから、一族の略伝を記そうと企てるのも無理からぬことである。

「ヨハン・セバスチャン・バッハの属する一族には、音楽への愛と才能が、その一族すべての人たちに對する共通の贈物として、自然から授けられているもののものである」

と記してあるのを読んでも、あの大バッハとなれば、肉親間の誇張した自慢話とは聞こえない。

私にしても、ときにわが一族の肉親物語を書いてみたい気がないでもないが、とくべつ神の恩寵を授ったほどの先祖や縁者もないのだから、つまりは個人的な自慰の企てにすぎなくなるのは当然で、とても本気にかけるわけのものでもない。

そのかわり、といつては申しわけないが、ここ数年来、私の頭に去来しているのは、「恩師列伝」を書いてみたらどうか、という着想である。

私は日本海側の小さな町で育った田舎者だから、幼稚園なんて気のきいたところへは入らなかった。だから、最初の恩師は、小学校一年にあがったときの担任の先生である。そのかたが、私の生涯での最初の「先生」である。当然、そこから筆をおこすことになる。

そういう恩師の数をざっと指折っても、小学校時代には四人の担任の先生。中学校で十五、六人、高校でも十五、六人。大学では、ときおり盗聴にいった他学部先生まで含めて、ほぼ二十人。これでおおよそ五十余人となる。

むろん私は、近代国家の公共的な教育機関で学んできたのだから、たとえば松下村塾の塾生が、吉田松陰という教育的個性の信者であったとおなじ意味での恩師をもっているわけではない。あるいはまた私は、福沢諭吉や大隈重信の建学精神にもとづく種類の学園とは無縁な人間だったから、いわば当てがい扶持の恩師に偶然出会ってきたのだともいえる。

もっとも、そうはいっても、こちらがその個性につよく惹かれて信者となるに至った恩師は、何人かいらっしゃる。

ところで、私の「恩師列伝」。恩師を比較論評しようなどという不遜な企てではない。五十余人の恩師が、私という人間の、どの部分をどの程度に形成してくれたかを正確にいいあてることが出来っ

こないが、この五十余のかたがた以外の先生と出会わなかった以上、この五十余人の恩師は、いってみれば私の運命となって、私に内在していることは確かである。

そういう意味で、「恩師列伝」というのは、私の自叙伝の一つの試みになるわけである。

まずは、とりわけ印象深い先生のことから書いてゆくつもりだが、いざ、そのことを試みるとなると、当然私は過去の自分に会おうことになる。かつて私が経過してきた姿を、恩師という鏡にうつして、自分自身のために再現することである。

自分で自分をふりかえるのは、かなりテレくさいことであるが、こういう企てを考えるようになったのは、たぶん私がすでに若くはなくなった証拠であろう。というのは、つまり自分の少年期や青年期に対して、いまはもう、なまなましい嫌悪や羞恥を持たなくてもすむだけの歳月の距離が生れたということなのだから。

その意味では、この試みは、すでに私の中で死にかけて自分を描いてみることであって、自分が自分に書く一種の「死者略伝」だともいえよう。

2

小学校一年のときの担任が伊藤正三先生。いまでも元気で悠々自適していらっしゃる。先年お目にかかったときは、

桑いちごもぎしふる里のかの丘に少年の日ははるかなりけり

と自作の歌を書いた色紙をくださった。このことからわかるように、先生は歌人でもある。

この町（新潟県糸魚川）には、相馬御風先生がいて、短歌運動を推進していたから、その門弟は多い。伊藤正三先生もその一人である。一人、どころか、もっとも有力な側近門弟である。御風先生がかつて主宰していた短歌誌『木かげ』は、御風歿後のいまは、この伊藤先生が編集責任者となっている。

伊藤先生が歌人であった、というようなことは、小学一年の私にはわからないことであった。

小さな田舎町では、先生のプライバシーはすべて筒抜けで、昨夜はどこで酒をのんだとか、その帰り途、自転車もろとも河へころげ落ちたとかいう話題は、それらしい尾ひれがついて、たちどころに学童たちの耳にまで入る。

伊藤先生は、酒のうえのエピソードがかなり多い人であった。固苦しい教育者観からすれば、かならずしも賞められることばかりではなかった。いまだきの教育ママ的PTAの監視下であったら、退職まで追いこまれなかったとも限らない。

私が先生の歌について知ったのは、かなり高学年になってからである。さらに、先生の歌をゆっくり拝見するようになったのは、はるかにのち、もう私がすっかりおとなになった数年前、先生の歌集が編まれてからである。

先生には、たとえば、つぎのような歌がある。

低能児信二の家は浜添ひに軒を低めて建ちてあるなり

魚の腹洗ふ手やめて迎へたる^{おうな}媼よく見れば^{すがめ}眇目なり

この媼の呂律まはらぬもの言ひはまことし信二に似たるなりけり

吾子^{あこ}かこつ媼の言葉かなしかり何かを吾に言ふを得むかも

家庭訪問から生れた一連の歌である。こういう歌をいま読み返してみると、深酒に託していたこの先生の心の動きが、おのずと見えてくるような思いにとらえられる。

小学一年生の目からは、先生はかなりの年輩の人とうつた。いま指を折って数えなおしてみれば、先生は当時三十代だったはずだが、四十代か五十代か六十代か、とにかくそれは、絶対的に権威ある年齢であった。

しかし私はこの先生から、一度も威圧的なものを感じたことはない。ある日、私が家のなかでいたずらの昂じた乱暴をして、そのことで家人が先生に連絡したことがある。翌日私は覚悟をかためて登校すると、案じたとおり放課後に呼びつけられた。

誰もいなくなった教室で、先生と一対一でむかいあうのは気の滅入ることである。しかし、このと

き私は、それほどこわいとは思わなかった。たいへん生意気なことだが、私は、「あつ、先生も困っているな」と思った。このかたは、こどもを叱りとばすなんてことのできない人なのである。また、自分のやりかたを相手に押しつけるなんてことのできない人なのである。

それは一種の気の弱さともいえる。また人間の心に対してデリケートだともいえる。

先生は私に対して、最後には型通りのお説教を、ほんのつけたしのようにいって、「もう帰っていいよ」といった。

むろん、私はほっとしたが、先生のほうも、ほっとした、というふうがありありとみえた。

その夜、先生はやはりずいぶん酒をのまれたようである。その夜は何かの宴会があったのかもしれない。またしても派手なご婦館ぶりだったと、翌朝にきいた。私はなんとなく、私を叱らなければならなかったという先生の心の負担が、その夜の酒と結びついているように受取った。

私が小学校へ入ったのは、昭和八年。その年から教科書が変わって、国語の第一頁が、サイタ サイタ サクラガ サイタ であった。新入学の子の最初に出合うのが、サクラガ サイタ だというのは、いかにも自然な日本の風景である。といたいところだが、つぎのページが、ススメ ススメ ヘイタイ ススメ となるとここに、この教科書に盛られた国家的意図がある。これではどうしたって、サクラとヘイタイが一つのセットとなるように仕立てられている。サクラを賞でるからには、ヘイタイとなってハラハラといさぎよく散っていかなければならない。軍国主義的傾斜のはしりであ